

---

# 主の望みし世界 ～それは善か悪か～

三浦 記使徒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

主の望みし世界　　それは善か悪か

### 【Nコード】

N6306B

### 【作者名】

三浦　記使徒

### 【あらすじ】

そう遠くない未来。人類は超高性能AIである「神」を生み出し、それによる完全統治を行っていた。誰も疑うことのない、まさに楽園。そこに暮らす主人公もまた同様だった。しかし、ある日。発達しすぎた情報化社会は、人類にいかなる問題を突きつけるのか、をテーマに書きたいと思っています。

## プロローグ

「神は死んだ」……そんな事を哲学者ニーチェが言っていた……。  
。同時期のキルケゴールは神を賛美した。

あの頃は神は人間の心の中心にいつもいた。十九世紀は神中心の世界であつたといつても過言ではない。

だが、科学技術が進歩するにつれ、人間は自らが神とも取れる行動を繰り返すようになった。不可侵的領域へと足を踏み入れるようになった。

それが……「神」。

人間が作り出した最高の発明にして、絶対に触れてはならない物だが、人間は「神」を創造する事で、神を超えた。自らが神を越えし「神」となったのだ。そして今、人は人という殻を破り、「創造主」となった。

だが、「神」は創造主を越えてしまうと誰が想像しただろうか？

「神」は進歩してしまった。自らを創造主とし、「創造主」を越え、自身が「創造主」となったのだ。

人間は結局、太陽に近づきすぎたイカロスが海に落ちたように、人間は「創造主」から人間になってしまったのだ。

そして、人間の時代は終わった。

人間は、人間自身が作り出してきた長い歴史を、自身の作り上げてきた文明の産物によって、失わせてしまった……。

『私はあなたがたに超人を教える。人間とは乗り越えられるべきものである。あなたがたは、人間を乗り越えるために、何をしたか。およそ生あるものはこれまで、おのれを乗り越えて、より高い何者かを創ってきた。ところがあなたがたは、この大きい潮の引き潮になろうとするのか。人間を乗り越えるより、むしろ獣類に帰ろうとするのか。』

引用  
（ニーチェ著「ツァラトゥストラはかく語りき」（第一部）より）

## 第一部・1：“Brave New World”；

「神」が人の世に初めて姿を見せてから8年。

「神」は全知全能で、分らないことは何一つ無かった。「いつ頃鍵を無くす」、「明日友達と喧嘩をする」、までの確に当てていた。

僕自身、「神」の一言で全てうまくいっていた。だから、「神」を心の底から信奉していた。

それだけじゃない。経済・教育の発展は目覚ましいものになった。科学技術の急速な進歩・国際紛争の完全沈静化……。

だから「神」は絶対だと政府までもが認めてしまった。そして、国民は皆人生の全てを「神」に捧げ、その通りに生きる事を「人間」とするようになった。

過去の歴史書に書いてあった、「平氏にあらずんば人にあらず」というフレーズを見たとき、時代は繰り返すのだ、と実感した。と同時に「じゃあこれからは平氏のように滅亡の道を歩むのか」と思った。

だから、「神」に聞きに神殿まで行った。神殿とは、都心の真中に建っているピラミッドのような高い建物である。この建物には誰もが入る事が無料で入る事が出来る。

僕は、礼拝堂に入りそこでモニターに向かって聞いてみた。

「あなたは平氏のように今から滅亡の道を歩んでいくのではないですか？」

神は「私は全てを知っている、何故平氏が滅びたのかも。結果も過程も知っている」と答えた。

つまり「神」自身が作った物語だから「神」の思い通りになるという訳だ。

その帰り道、礼拝堂の入り口で友人に会った。

彼の名前は「藤堂 亮<sup>とうどう あきら</sup>」、僕と同じく十八歳。かなりの変人であ

るが、頭はかなり切れる奴である。

彼にとって学校の授業とは自由研究だと言って良かった。昔から訳の分からない数式のようなものを並べ立てては、先生に証明を要求していた。それは生徒に対しても例外ではない。特に僕に対しては。

この前などは、フェルマーの最終定理の証明を僕に要求してきた。もちろんできるわけがない。

あまりに突拍子も無い話をするから、しばしばフリーズしてしまう。

「珍しいな。お前が礼拝堂に来るのは」

僕が聞くと、彼は微笑して「まあね……不本意だけど……」

僕は「お前は神をどうして信じてないの？　ありえないよ……」と言った。

彼は「俺はこの世界はおかしいと思ってるんだ。」と言った。

僕は「この世界の何がおかしいんだ？　神の示す通りに行動すれば、幸せに暮らせる。誰もが不幸に会わずに済む時代は人類の夢だったじゃないか？　神のお陰でこの国も進歩し、見ろ。この町を。皆が望んだ世界がここにある」と言った。

彼は微笑したまま「俺がここに来たのは神を崇拝しに来たんじゃない。お前に伝えたいことがあるから来たんだ」と言った。

僕が「何だい？」と聞くと「とりあえずついて来て」とすたすた歩きだした。ちょうど時間があつたのでとりあえずついて行っちゃった。モノレールに乗って、地下鉄に乗って、市街地の端のような場所に来た。

周りはまだ暗く、人氣がまったく無い道だ。

そこを上ると町を見渡せる丘に着いた。

眼下に大都市の夜景が広がっていた。

突然、彼は「目を閉じてみて」と言った。

言われるがままに、僕は目を閉じた。

それから5秒位だろうだろうか。「いいよ」と言われて目を開ける。

さっきと何一つ変わらない光景が広がっていた。

「一体何なんだよ……意味わかんないよ」

すると彼は、

「目を閉じて外界と一度自分を遮断する、その刹那自分の時間は停止しているが、世界の時間は動いている。この時間は誰も干渉できない。自分はその時間は止まっているとおもっているが、外界は動いているとして理解する。つまり干渉できない、相容れない関係がそこには存在している。つまり、どんな人にも『絶対的存在でも干渉できない物があるんだ、それは、心であるかもしれない記憶かも知れない』。俺にとっては、それが『今のこの国の神の存在を信じてはいけないもの』であっただけなんだ。覚えていてほしい。我々には干渉してはいけないものが存在しており、干渉できないものもあるって事を……。お前にはあるか？ 干渉してほしくない物、誰も干渉する事が出来ないものが。今のこの世の中は人間が元来持ち続けて進化を続けた自己の内面の強さを、向上心を、自分を信じる心を完全に忘れてしまった。だから、人生を幸せにしようとする努力をしなくなった。まやかしのような存在に全てを委ねるようになった時点で人間は、人間であった事を忘れてしまった。人間って「神」の言う通りに生きる存在じゃなくて自分で考えて動く存在じゃないのか？ 確かに今は社会を幸せにしたのは紛れもなく「神」だが、人々はそれで幸せなのか？ お前は今幸せか？ 俺は今の人々が心の底から「生きる」喜びを感じているとは思えない。定められた道

をただ歩くだけ、何も変化の無い暮らし。聞けば答えが返ってくる  
淡々とした機械音。明日のテストの点数は？ と聞けば「60点」  
のような答え。努力しても結果が分っている。努力しようとできる  
か？ 思いが湧いてくるか？ そんな決まった未来に夢を持つこと  
が出来るか？ 俺はこの国に未来はないと思ってる。この国は何か  
がおかしい。何か大きな別の力が動いているような、気がしてなら  
ない。だから、俺は「神」の正体は何なのか調べて見る。俺が生き  
て正体を見つけれられるとは思わない。だから、これを託しておく。  
誰にも渡してはいけない。頼んだ、これが神に近づく鍵になるかも  
知れない」

彼は首に掛けていたペンダントを僕に渡した。

きれいなペンダントだった。

「これはあいつが俺にくれた大事なペンダントだ。だから大切に  
してくれ」

「分かった。だから生きて帰って来て、僕の所に取りに帰って来る  
と約束しろ」と言った。

すると「分かった、善処する」といって彼は笑った。

僕が首にペンダントを掛け終えると彼は一言、「自分を思い出し  
人間の尊厳を思い出せ。そうすれば世界は変わる。俺もお前もそし  
て世界も・・・」

そう言うのと彼は遠くを見るような眼で遠くの眼下に見える礼拝堂  
を見た。

しばらく思いつめたような顔でしばらく黙り込んでいた彼は、ぽ  
つぽつと話始めた。

「俺が何故この世界の神を信じていないか教えておく……」



## 第二部・1：“Life goes on”;

「俺の信じている神はこの社会の神ではない。俺は15歳の冬、確かに神を見た。俺は今まで神つてのは長いひげをした爺さんだと思つてた。でも、違った。俺の見た神は女の人だった。すぐくやさしい目をしていた。あの時俺は好きだった恋人「武藤 エリカ」を失った直後の夜だった。あいつはいつものように俺と放課後この丘で町を見るのが日課だった。いつものように、ただ肩組んで、どうでもいい話をするだけ。でもその時間は俺達の至福の時間だった。誰も邪魔出来ない時間だった。ここまではいつも通りだった。でも……。

「先帰るね！ 今日はお母さんの誕生日なんだ！ 今日くらい早く帰ってあげないと♪」

「オッケー！ お母さんにおめでとうございますって言っというて」「分かった！ じゃねー！」

あいつは丘を駆け下りてった。それが俺があいつを見た最後だった。

帰り道、警察から話し掛けられた。「失礼。そこで通り魔事件があったのですが犯行現場を見ておられなかったでしょうか？」

「いえ……今通ったばかりなので、その事自体今知りました……」

「そうですか、いや7人もやられてて、死傷者も出てるんですよ……」

……

「そうですか……すみません……」

「いえいえ、まだ犯人が捕まっていないので、気を付けてください  
ね」

「はい、分かりました」

家に帰ってゆっくりしていると電話が鳴った。エリカの家からだ

った。

「もしもし藤堂です。」

「エリカが……エ……リ……力が……」

「エリカさんがどうかしたんですか？」

「エリカが……死にました……」

……俺はその後の記憶が無い。

後から聞いたが、病院側があまりに痛々しいので遺体にあわせてくれなかった事。

警察も犯人を捕まえたが詳細は被害者側にも捜査中として教えてくれなかったらしい。

その日から俺は学校にも行かなくなったし、外に出かけるのもやめた。

人との接触をさけるようになった。この世の神を呪った。

人々を平和にするのが神の仕事ではないのかと問いつづけた。

そして何も出来なかった自分を呪った。

そして神を信じなくなった。

そんな日が一年続いた。もう自分が存在する意義ですら失い、何故生きているのかすら分からなくなっていた。

あの日から今日で一年……。

俺もあいつを追い、今日死のうと心に決めた。

エリカと最後を過ごしたあの場所で死のうと決心し、あの丘に向かった。あの日と同じ雪の日だった。

自分の心が大きく変わってしまったあの日からまったく変わらないう夜景がそこにあった。

俺はしばらくそこでエリカとの思い出に浸った。

あの日に帰りたい……何度願ったか……だが、神の答えを聞こうとは思わなかった。エリカを奪ったあの神に頼りたくはなかった。

それ以前に分かっていたのかも知れない。失った命は二度と帰っては来ないと……。

どんなに科学が進歩してもこれだけは過去著名な科学者達が挑み続け挫折を味わい、不可能であると実証されていることを……。

悔しくて涙が出てきた。あの日全ての涙を出してしまったかの様に涙が枯れてしまっていた俺に再び涙が零れた。

やるせない気持ちがあふれ出てきて、叫ばずにはいられなかった。意味はない。ただこの社会に向けて何かを残さなければ、エリカや俺の死が無駄になる。何故か体が勝手に動いた。

ただ一言「馬鹿やろう」と……。

その時だった。急に周りが明るくなった。

大量の流れ星だった。信じられないくらいの流れ星だった。

すると後ろに人の気配を感じた。後ろを向こうとしても体が動かない。

でも、不思議と怖くない。むしろ温かみを感じた。

「あれ……懐かしい感じがする」ふと思った。  
すると後ろから、

「亮……」

「この声……エリカ!？」

「亮……死なないで……私の分まで生きて……」

「エリカ……でも俺はお前無しでは生きてはいけない……」

「大丈夫……ずっと側にいるよ……亮の側に……」

「エリカ……でも……俺……」

「大丈夫。いつでもあなたを支えてる。いつでも側にいるから。だから生きて!そしてあなたの道を見つけて……だから……」

背中の中もりが引いていく……。

「待って!! エリカ!! 俺はまだお前に言いたい事がある!!」

「頑張つて。そして生きて。」

体が動く……急いで後ろを向く……。

見えたのか見えてないのか分からない。でも確信はある。

確かに後ろに笑ってくれているエリカがいた。確かにエリカだった。

俺には神に見えた。俺の冷え切った心に再び火が灯った。

あの時のエリカは優しい目をしていた。

伸つてのが分かった気がする。伸つて言うのは、こういうものなんだと……。

本当にその人間が苦しんでいる時に少し背中を押してくれる。

それが神なんだって……。

神の姿は人それぞれ違うと思う。

神の姿って確立されたビジョンは無いと思う。

神がこの世界を幸福にしているって言われて何年もたつけど、誰も「神」の姿を見たものはいない。

ただ、モニターから答えるだけ、機械的なやりとり……。

人間は見えないものに恐れを抱く。

神が見えないから人間は神を恐れる。

昔暗闇が怖くていつも暗闇を避けてた。

でも、兄貴に言われた。

「人間自身がつとも恐れるものは自分の心だ。心に映る恐怖心はその人の恐怖なんだ。怖いと思うから怖いんだ、その思いが恐怖なんだだから、自分が変われば怖さは無くなる。」

それを聞いた時思ったんだ。

自分自身が変われば全てが変わる……過去も未来も現在も……そして世界も。

だから、俺は神に自分を委ねない。

たとえ、自分を幸福にすると言われても、俺は信じない。

本当の神は必要な時にしか手を貸してくれない。

でもそれが神なんだ。

『今の神は「神」であって、「神」ではない……。』

僕は何も言えなかった。

藤堂にこんな過去があったなんて……。

こいつがこんなにも苦しんでた時期があったなんて。

でも、こいつが神を信じない理由が分かった気がする。

それが藤堂 亮と会った最後だった。

次の日、亮は転落死した。警察は自殺と断定したが僕は信じられなかった。

でもこれが、僕の運命の歯車を大きく動かすきっかけになろうとは思っても見なかった。

神が誕生するきっかけになったあの事件を人々は忘れ去れさっている。

だが、神を誕生させるきっかけとなった事件の傷跡は今でも生々しく各地に残っている。

都心部からモノレールで6分ほどの国立公園。

ここは大自然に囲まれた壮大な公園である。

市民の憩いの場として、常ににぎわっている。

その中には、街の中でもデート・スポットとして有名な噴水や、犬の散歩に適した遊歩道、そしてサイクリングコース……。

数々の名スポットがあるがその中でもっとも人気なのは喫茶店『紫苑』。男女共に絶大な支持を誇る名店である。

その紫苑でもっとも人気のメニューは『エスカルゴのパイ包み焼き』と、『地中海風リゾットのマヨネーズ添え』である。

僕はこの店は藤堂から良く聞いていた。

特に『エスカルゴのパイ包み焼き』は最高に美味しいらしい。

だが、その藤堂は今、もういない。

僕は一人で、こんな高級そうな店に行くことに慣れていなかった。でも、何故か、藤堂が死んでから、ここに行かなければならないという使命感のようなものに苛まれるようになった。

何故だろう……。まるで藤堂が僕をここに引っ張っているような……。

そんな感覚である。

そして今日……僕は紫苑の前に来た。

何故だろう……。とても久しぶりな気がする。

取り合えず入ってみよう……。僕は古風なドアを開ける。

「チリンチリン」といい音になる。

すると勝手に口が動いた。

「ただいま」

すると店長らしきおじさんが迎えてくれた。

「やお帰り。パイ包み焼きだね？」

何故か僕の食べたいものを当てる。

「あ、はい……でもどうして分かるんですか？」

すると彼は笑いながら、

「それは秘密さ。」と言った。

「でも今日はあいにく一杯でね……相席でいいかな？」と言われた。

初対面なのに何故こんなに親しげに話し掛けてくるのか。  
でも全然不気味じゃなかった。

そして今日、むしろ心地よかった。

僕の家族のような温かみがあった。

だが、僕の家族は6年前死んだ。いや、死んだらしい。

僕には記憶がない。ずっと意識不明だったらしいから……。

「ええ、構いませんよ」

「じゃあこちらに……」

連れて行かれた席は噴水が良く見える景色のいい窓側の席だった。  
そこに座っていたのは、品のいい老紳士だった。

僕を見上げると紳士はにっこり笑った。

……やっぱり知ってる気がする。でも誰だろう……？

「じゃあしばらくお待ちください。すぐに持ってきますので」

僕は店長が厨房に引っ込んだのを見届けてからすぐに老紳士に聞いてみた。

「あの……勘違いだったらすみません。一つ聞いていいでしょうか？」

すると老紳士が食べるのをやめてこちらを向き笑いながらこう言



った。

「私と君が会ったことが無いかって？そりゃあるさ」

僕は口がきけなかった。何故何もしゃべってないのに……何故？すると彼は「聞きたいかい？理由が。ここでは言えないね……。」

料理に集中したいから」と言っで微笑みまた食べた。

僕もとりあえず運ばれてきた料理に手をつけた。

「おいしい……」

すると彼は「懐かしい味だろう……君はこれが大好きだった。亮君も好きだったよ……何杯も食べてお腹を壊してね……。」

と言っで僕を見て笑った。

「藤堂を知ってるんですか？」僕が言っで彼は、

「別のところで話そうか」と言っで席を立とうとしたが、僕が食べているのに気が付いてバツが悪そうに席に戻った。

僕が食べ終わると彼は僕の伝票までもってレジに行った。

僕が慌てて断ると彼は「今日はおごりだよ」と微笑んでお金を払っでしまった。

次に彼は私を外に連れ出し公園を歩きだした。

「今は客が多い。スパイも多くいる。だから人が少なくなるまでこの老いばれとしばらくつきあってくれんか？」と言った。

僕も嫌ではないし、むしろもっと彼の話を聞きたかったから付き合うことにした。

彼はしばらく無言で歩き、噴水の側のベンチに座った。

僕が座り終えると彼はこっちを向き、ペンダントを見て、一言だけこう言った。

「亮は君に全てを託したんだね……」

僕は答えることが出来なかった。

### 第三部・2：“Who am I?”

「亮は小さい頃から頭が切れる子だった。

特に数学やコンピュータ関連の飲み込みは大人をも驚かせる才能があった。あの子はある種の天才だった。

そんな亮がある日『僕、新しいシステム作ってみただけど、どうかな？ ヴイツツシステムに新しい機能加えてみたんだけど……』  
、と言ってディスクを持ってきた。

どんなおもちゃを持ってきたのか取り合えず、私はチェックしてみた。

うそだろ……。

そこにはまったく今まで考えたこともない理論からはじき出されたシステムがあった。

ヴィツツシステムを搭載しているマイクロチップを持つものだけ、任意で情報共有できるシステムであった。ただそれだけでなく、その情報共有の際に送信される周波数はヴィツツ搭載マイクロチップにのみ連動するという優れものだった。

『これをどうやって……？』

私は驚いて彼に聞くと、造作も無く言っただけだ。

『なんとなく。通信機の設計図見てたら思いついたの。通信機単体ではうまくいかないのが分かったし、持ち歩くの面倒だし、だからマイクロチップの機能に追加しようと思ったの。ダメだった？』

私は彼を末恐ろしく感じた。この子こそ神が愛した神童ではないのか？

この子なら今に社会を変えられるんじゃないか？

私は彼に聞いた。『亮……今の世界をどう思う？ 神が全てを統治するこの社会を……』。

すると、

『僕は嫌いだ。自分で考えて動けないなんて。好きな遊び、好きな色好きな女の子。全部神様が決めてしまうのは僕は嫌いだ。それじゃ翼をもがれた鳥さんみたいじゃないか……。飛べなくなった鳥さんに何の喜びがある？ 自由に好きなところに飛べなくなった鳥さんはどう思う？ 苦しいと思う、きつと……。だから、今もみんなほんとは苦しんだよ……。だから、僕が助けてあげるんだ。神から自由の世界に開放してあげるんだ！ それが僕の夢。でも、僕だけじゃ出来ない。だから、おじさんも協力してよ。』

私は嬉しかった。こんな小さな子供がこう思ってくれることが。私は間違えてはいなかった。彼の言う通り人間は自由でなければならぬ。

私のやっている事は正しいのだ。この子達が本当に心から笑って暮らせる。

自由に道を作っていける世界を作らなければならない。

改めて彼に教えられた。子供は素晴らしい。真実を言ってくれる。だから、彼の思いは今も私の中に……。いや。組織みんなの心の中心に生き続けている。

そして君の中にも……。

私は、君がここに來たのは偶然じゃないと思ってる。

彼が君をここに連れてきたんだよ。彼が君に全てを託したんだよ。君なら全て任せられるとね。だから彼は君に全てを教えたんだらうね。

今不思議に思っているだろう？ あれ。この話昔聞いたことがある、とね。

当たり前だよ。君は亮にいつも聞かされつづけてたからね。

毎日毎日、君のあの時の嬉しそうな顔を皆忘れていないよ。

同じ話なのに君は嬉しそうに聞いていたからね。

みんなこの二人がこの世界を変えてくれると信じていたからね。」

「でも、僕はその組織の事ほとんど覚えていないんです。確かに懐

かしい感じはするけど、夢だったみたいな……そんな感覚なんです。僕は一体何者なんですか？　僕は今まで神を信じて生きてきました。神の言う事を聞いて生きてきたら何一つ失敗は無かった。教えてください！　一体僕は何者なんですか？」

すると彼は、

「君は君だよ。自由に道を作っていける人間のあるべき姿だよ。そう。君は『藤堂 怜』という個人だよ。」

「僕が『藤堂 怜』？　僕は『綾瀬 怜』ですが……。」  
すると彼はきっぱり言い切った。

「それは君の偽名さ。君は今までこの社会の情報収集を任務とする、任務に就いてた立派なロンギヌスの職員さ。」

このおじさんは何を言ってるんだ？　僕は今まで立派な普通の普通の大学生で一応一流大学に入学した、ほんとの普通の男子なのだが……。

僕は心の中で彼に訴えかけていた。

すると彼は笑いながら、

「普通だから素晴らしい、それが君の特技さ。知っている事を完全に隠し切る事が出来る、君は尋常じゃない適応能力を持っているからね。」というではないか。

「君は立派に任務を実行してきた。亮は適応能力が低すぎてね……。よく君を困らしていたそうじゃないか。私自身ひやひやしていたよ。神に情報が漏れるんじゃないかとね。だが君がいつもうまくフォロ―してくれたお陰で彼もずいぶんと助かっていたみたいだが……ね。」

彼はそういうと僕の手を握った。

「ありがとう。そしてお疲れ様。」

なにが何やら……やばい。またフリーズしそうだ。

「おっと、もうこんな時間だ。そろそろ戻ろうか。」

気づけば周りはまだ暗くなってきている。僕達は急いで喫茶店に戻った。

#### 第四部：“NEW JOURNEY”

喫茶店に戻ると店長しか残っていない。

「お帰りなさい。遅かったですね。どうでした？久しぶりの息子との会話は？」

は？

「おいおい、小林君……私は育て親だよ。まあ失格だがね……」  
ちよつと待って……この人が育て親？初めて聞いたぞ……。

ダメだ……また頭がフリーズしそうだ。メモリが足りない……。

「まあそれはいい。そろそろ下に降りようか」

二人はスタスタ歩き出す。

慌てて追いかけると、彼らは倉庫に入っていく。

僕も慌てて中に入ると、二人がいない。

「どこに行ったんだ？ちよつと待ってくれ。どこにも隠れる場所なんて無いじゃないか。訳分かんないよ……ったく……」

僕は樽に座り込み、途方に暮れた。

しばらく考えていると頭が冷静になった。

「待てよ。僕が彼らを追いかけて姿を見失うまでに約三秒……、その間にこの空間で隠れることはほぼ不可能。大の大人が二人隠れるスペースも無い……。となると、この短時間に違う部屋に移動するしかない。しかし、短時間で空間移動する為にはかなりの高速で動くしかない。人間が一番早く生身で移動する方法は一つ……、重力に任せて落下すること。だが、床が抜けるような仕掛けがあれば、関係者以外にもばれてしまう。ならば、関係者しか持っていない物が必要。だとすると、やはりこのペンダントだろうな。だが使う場所もこの暗闇では分かりづらいだろう。ならば、分かり易い。僕にとっては。このペンダントがスイッチになり得る事象は限られる。投げるか、置くか、のどちらかだろうな」

投げてしまえば無くしてしまう可能性がある。

ならば置くしかないだろう。

しかしどこに置く……僕ならどうする……。

考えろ……僕ならどこに置く……。

関係者にしか分からない事……、

一般人ではわからない方法……。

この組織名はロンギヌス……、ロンギヌスはキリストを殺した処  
刑人の名前。

ロンギヌスはキリストのわき腹を刺した。

ならば、これに近い方法を関係者は取るだろう。

この部屋をキリストに見立てると、ドアが槍であいた穴……ならばそこを埋めて補完する方 方法は……。

このペンダントをドアにはめる。

しかし、ドアにはめ込める場所に限られる。鍵穴かのぞき穴……。  
のぞき穴が一番自然だな……。

僕は試しにのぞき穴にはめ込んでみた。

突然、床の感覚が無くなり、ものすごいGが体にかかる。

「……組織関係者が考えそうな答えだな。しかし初めて聖書が役に  
立った気がする……。このご時世にアナログ過ぎだろ……。これ……。  
だが亮……ペンダントと言う事だったんだね。一応感謝かな？」

僕は何故か余裕にも考えていた。

と、突然下からものすごい空気が上がってきて、落下速度が急激  
に遅くなる。

急に景色が開けた。

「……すごい……」

僕の目の前にはまるで司令室のような広い空間が現れた。

目の前にはとても大きなモニターがある。

なるほど映画館のような作りである。

ただ違うのは、部屋の座席中央部分だけ高さが違う。

まるで、幹部達専用のような雰囲気である。

そこにゆっくり地面に着地する。

するとさっきの店長がお出迎え……。

「五分か……四年前以来にしたら上出来だね。さすが藤堂一家の次男だ……」

「まったく、藤堂一家は化け物ぞろいだな……。我々にとっては救いだが……」

といきなりメガネをかけた大学教授のような人が出てきた。

僕は何がなにやら訳がわからなかった。

今日ほど刺激の強い日は初めてだ……。

「待ってください！ さっき僕が藤堂一家の次男って言いませんでしたか？」

すると大学教授のような人がきっぱりと答えた。

「いかにも次男だ。すなわち藤堂亮は君の兄さ」

僕は世界のときが止まったような気がした。

藤堂亮が僕の兄？ 馬鹿な……。

## 第五部・1：“STRANGER”

自分の兄が藤堂亮……。

僕は狐に抓まれたような感覚だった。

藤堂は何一つそんな素振りを見せなかったではないか。

いや、見せたかも知れないが、僕は一切気付かなかった。

確かに、どこか懐かしい感じはしたし、馬が合った。

だが、それだけで彼が兄貴だとは分らない。

僕は、あまりの驚きで、地面に座り込んでしまった。

すると、小林さんが笑いながら手を差し出してくれた。

僕は、それを掴む気になれなかった。

しばらく一人で考えさせて欲しかった。

すると、小林さんは気が付いたのか手を引っ込めた。

しばらくじっとしていると、落ち着いてきた。

僕は、立ち上がり、小林さんに尋ねた。

「僕の兄が藤堂亮である事は不完全ながら納得しました。しかし、腑に落ちないことが一つあります。それは、僕が一八歳なのに対して僕の兄である藤堂亮も一八歳。これでは説明が付かないではないのですか？」

すると、小林さんは造作も無く言っただけだ。

「君と亮は双子だよ、彼の方が先に生まれたから兄っただけさ」

大学教授風の男性が続ける。

「藤堂一家の人間たるものが、そんな単純な事にも気が付かないのかい？ 頭のいい人間は時として、物事をあまりに深く考えすぎる事がある。それでは、これから、大事な事を見落とすかも知れないぞ」

……たったこれだけに酷い言われようだな……。

まるで、なんか悪いこと聞いてしまったみたいではないか……。

多少なり自尊心を傷付けられた気がした。



互いが険悪になりそうな雰囲気の中、突然テンションの  
高い声が下から聞こえてきた。

## 第五部・2：“REST”

「あーいらいらするな。なんでこのコンピューター、要求してない情報を表示するかなあ？」

『霧島主任の血糖値の正常値オーバーを確認。即刻、食生活の改善を要す』

「余計なお世話だ！ 毎回毎回勝手に俺の血糖値測りやがって。お前は空気を読め！ 俺らが食生活を気にする生活を送れる訳無いだろうが！」

『霧島主任の血圧上昇を確認、収縮期血圧一四五mmHgと確認。高血圧の可能性あり、即刻対処法を表示します。また、余計かも知れませんが、私はコンピューターであり空気を吸う事が出来ないため、味、匂い等の人間の五感で感じる事の出来る概念が分かりません。空気を読むと言う行動は具体的にはどのような行動なのでしょう？ また、空気が透明な気体にも関わらず何故読むことが出来るのでしょうか？ 今後の任務の為、是非学習しておきたいのですが』

「んー……だんだん破壊衝動が芽生えて来たぞ……。大体な、全部余計だよ！ お前は黙って情報収集してろ！ もしくは暫くROMってろ！」

すると僕らの目の前にある大きなモニターに大きな字でこう映し出された。

『霧島主任のナンセンスな要求を却下します』

これには司令室の全員が笑った。

だが霧島主任だけは血管が浮き出そうな位な真っ赤な顔をして叫んでいる。

小林さんが僕に嬉しそうに話し掛けてきた。

「怜君、これがロンギヌスの最大の娯楽の一つさ。あのコンピュータ『Veronica』と霧島主任の漫才は仕事でストレスの溜まった職員に癒しを与えているんだよ。ただし、霧島君だけは、ストレスが三倍になるがね。かわいそうな霧島君……」

と言いながら、少しも哀れみの表情が無い。

むしろ、嬉しそうだ。なるほど、小林さんの人格を垣間見たぞ。

そんな小林さんに大学教授風の男性が話し掛けた。

「局長、そろそろ時間も押している事だし、先に進めないか？」

(……この人局長だったんだ。やっぱり記憶が無いぞ……)

すると小林局長は慌てて僕に自分の横に来るように促した。

僕が隣に行くと、ハンズフリーマイクを付けて話し始めた。

声が部屋中のスピーカーを経由して聞こえる。

「諸君！いつも任務ご苦労様。特に霧島主任！君の頑張りはいつも見ているよ、ボーナス増やしてあげようか？」

すると霧島主任はまじめな顔で、

「ボーナスよりもVeronicaの暴走を止める事を心から望みます。あいつが普通のコンピューターになれば、俺の作業効率があつとアップするので……」

すると、小林主任は真顔で答えた。

「主任のナンセンスな要求を却下する」

するとモニターに大きく文字が表示された。

『局長、ナイス センス！』

(これ、笑う所なのだろうか・・・?)

小林局長は満足そうに話しを進めた。

「仕事を中断してまで、聞いてもらう話は一つだけだ。我々のエージェントだった、藤堂亮が残念だが、殉職した。有能であった彼を失う事はかなりの痛手であるが、我々に悲しんでいる暇はない。一分でも早くこの情勢を打破しなくてはならない。我々に人類の運命がかかっているからだ。私は信じている！我々は間違えていないと！我々が人類を救う唯一の存在であると！そして必ず人類を解

放してみせると！ 我々が諦めてはならない！ どんな逆境にあつても我々は進み続けなければならない！ 諸君！ 歩みを止めるな！ 互いに仲間を信じあい、そして夢を叶える為に！ 自らを捨てる覚悟を持ち進みつつける！ 私は諸君を信じている！ そして諸君も私を信じてくれ！ 私は諸君を裏切らない！ 我が命が尽きるまで！」

言い終わると暫く黙って何もしゃべら無かった。

暫くすると彼はまた話し始めた。

「そんな我々にちよつとした嬉しいニュースだ。四年間、ずっと情報収集任務に当たっていた藤堂怜が本部に帰還した。久しく顔を見ていなかっただろう？ かなり昔より逞しくなったぞ。だが、四年間の任務の間に我々の事をほとんど忘れてしまっているようだから、諸君の顔を見ても分からないかも知れない。まあしばらく立てば思い出すだろうから焦らずに待ってくれ。」

全員に自分の紹介をし終わった後、局長は僕に休むように伝えた。確かに色々ありすぎて、体はもうくたくただった。

自分の部屋が準備されるまでの暫くは医務室で休むことになった。僕は医務室に案内されるとすぐに深い眠りに落ちた。

## 第六部：“CHILDHOOD”

.....

僕は夢を見た。それが自分の経験から来る夢なのかは分からない。恐らく自分である子供が砂場で鳥の絵を描いている。

僕が子供の頃の夢を見るのはこれが初めてである。

その横に僕とお揃いの服を着た少年の姿。

多分、これが亮なのだろう。

亮は砂場に数字を並べては、消している。

近づいてみると夢の中で僕は声をあげた。

彼が書いていたのは、「オイラーの多面体定理」だった。

オイラーの多面体定理と言うのは、膨らませると球になるような多面体の頂点、辺、面の個数をA、B、Cとすれば、 $A - B + C = 2$ が成り立つという定理である。

今の僕なら分かるが、常識的に考えて、小学一二年生が解けるような代物ではない。

むしろ、大学生でも解ける人間はほとんどいない。

それを何故、小学生が解いているのだろうか？

夢も中の僕は何も分からないのか、亮に話し掛けている。

「ねえ亮。それなにが面白いの？ 数字並べたって何も出てこないじゃん」

すると、亮は得意げに答えた。

「怜、これは位相幾何学の出発点の定理なんだ。これが解けるようになる事が、俺の今日の宿題だから」

「でも、こんなの小学校で先生に習わなかったよ」

亮は不思議そうに聞いた。

「怜は授業を聞いているの？ 分かっている事聞いたって意味無いだろう？」

「でも、僕は、お母さんから、きちんと人の話を聞きなさいって言

われたよ」

亮は首を振って答えた。

「怜、大人になれよ、いつまでも母さんの言う通りにすることが、善じゃないんだ」

すると、急に地面が暗くなった。後ろに人が立っているのだ。

僕達の後ろに人が立っている。

「こら！ 亮！ なんて事を怜に教えてるの？ 亮もまだ子供でしようが。まだ、一人で起きられない、料理も出来ないのに大人って言えるの？」

どうやら母親のようだ。僕は、母親の記憶がほとんど無い。

この夢で初めて母親を見た、が、顔が逆光で見えない。

「ごめんなさい、母さん。でも、学校の授業面白くないもん」

亮は拗ねたように答える。

すると、母親は亮の頭を撫でて言った。

「亮、早く大人になりたかったら人の気持ちを良く考え、人の言う事をしっかり聞くことが、一番の近道よ」

亮は頷いて母親の手を握った。

「さあ、怜も帰るわよ。今日の夕食は二人の大好物のカレーよ」

僕らは母親の手を握って夕日を背に帰っていく。

すると場面が変わったように反転して、自分が部屋で寝ている場面になった。

誰かが僕の手を握っているのが分かる。

が、姿が分からない。

すると、僕の感覚が寝ている僕の中に入っていくような感覚があった。

手に暖かい感覚がある。とてもあったかくて、大きな手だった。

「父さん？」

僕が話し掛けると、影が答える。

「心配せずに寝なさい。明日も早いから……」

そこで、僕の意識はまた遠のいていった。

.....

「…きて……起きなさいって」

誰かが話し掛けているようだ。

だが体は石のように重たく動かない。

「ったく怜はいつになったら一人で起きれるようになるの？  
ホン  
トに…子供なんだから……」

（なんだか懐かしい声だ……あ……母さんかな？）

「待って、母さん、もう少し寝させて……」

「何言ってるのよ。私はあなたのお母さんではありません」  
（……は？　どういう事だ？）

ここで僕は目が覚めた。

目を開けると蛍光灯に照らされた白い天井が見える。

眩しくて暫く目を細めていると急に布団を剥がされた。

暖かさが急に無くなって意識がはつきりする。

「はい、早く食堂に行くよ。私もお腹すいたから。」

これが彼女との出会いと言うか、再会だった。

正直に言おう。その少女は可愛かった。短めに揃えたさらさらした黒髪。

目は丹念に磨き上げた黒水晶をそのまま嵌め込んだようだった。目鼻立ちもしっかりとしており、体は細く見えるが、それは無駄な筋肉を一切付けていないからだと分かった。少女なのにある程度訓練はされているようだ。この機関の方針だろうか。僕は思わず見とれてしまった。

その少女は微笑みを浮かべ、言った。

「……もしかして、あたしに見とれちゃったり？」

はい。とはさすがにいえないだろう。こういう時はさりげなくほめるのが礼儀だ。

「はは。見とれてないけど、凄く可愛いよ」と僕は言った。

少女はまた微笑む。

「そろそろ食堂行かなきゃ、閉まっちゃうよ。怜」

「何で僕の名前を知ってるの？」僕はベッドから足をおろしながら言った。

「当たり前じゃない。さっき局長から紹介があったじゃない」少女は若干いらだちを見せながら言った。この顔も可愛い。「私は北条

D 美雪」

「美雪で良いわ。じゃ、行きましょ？」

そう言うとき彼女は先に歩き出してしまった。

「何よ怜のバカ……私のこと完全に忘れちゃってるじゃない……！」  
彼女が小さく呟いたのを、僕は聞き逃さなかった。

目的地の食堂まで行くのに非常に骨が折れた…。

なんせ、医務室というのは、医療棟の二階。

食堂は訓練棟の三階……この棟を繋ぐのは、エレベーターとエス



カレーターであるのだが、それがまた複雑であった。何回エレベーターに乗っただろうか……。

記憶はないが、昔この場所を縦横無尽に駆け回っていたはずであろう過去の自分にえらく、尊敬の念を覚えた。

移動中、北条美雪は色々話しかけていたようだが、一切覚えていない……。

理由は簡単である。何しろ余裕がないのだ。

この道順を覚えなければ、食堂に行けない。

死活問題である。食堂に行かなければ、自分の生命活動を継続できない。

そうすれば、自身は餓死というこの世の中では起こりえない死に方をする事となる。

餓死：思わず身震いをしてしまう。

やっとの思いで、食堂にたどり着く。

「着いたわよ！　ここが食堂ね！　本っ当に怜は、世話が焼けるわね！」

いきなりこの言い草かよ……。

ってか、まだ一度しか案内してもらってないぞ！！

一度だけなのにあたかも、毎回のことのように言う北条に早くも嫌気が差す。

「おいおい、まだ一度しか案内してもらってないぞ……」  
僕が話しかける。

うん。聞いちゃいねえな……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6306b/>

---

主の望みし世界 ～それは善か悪か～

2010年10月29日02時10分発行